

令和5年度 北空知地域入退院支援研修会開催結果・評価

項 目	内 容
1 日 時	令和5年12月14日(木) 18:00～19:33
2 内 容	1 事例検討 「腰椎圧迫骨折で入院し、在宅復帰予定の患者への支援」 「北空知地域入退院支援・調整ルール」を活用し、架空の事例によりグループワーク 説明：深川市高齢者支援課 小鍛冶 真由美 氏
3 出席者	歯科医師1名、看護師15名、保健師5名、介護支援専門員7名、MSW・SW・相談員3名、精神保健福祉士1名、社会福祉士3名、管理栄養士1名、作業療法士1名、薬剤師1名、行政職2名 参加申込者は49名だったが、欠席9名、当日受付0名、 合計40名であった。
4 結 果	1 事例紹介「腰椎圧迫骨折で入院し、在宅復帰予定の患者への支援」 ・配付資料により架空の設定の事例を説明。 ・今回は架空事例のため質疑の時間は特に設けず、各グループで自由な発想で支援を検討してもらうこととした。 2 事例検討（グループワーク①及び②） ・全8グループ、1グループ4～5人で検討を実施。なるべく多くの職種がグループになるよう事前に調整。欠席の連絡があれば再調整した ・テーマ「【退院へ向ける時期】【退院の見込みがいたら】退院に向けた情報共有について」 ・「北空知地域入退院支援・調整ルール」に定められている上記項目においてどのように情報共有していくかそれぞれ職種の立場で検討・情報交換した ・各グループにファシリテーターを配置。ファシリテーター（総合司会等も含む）は事前に希望があればオンライン等で予行演習（運営から説明を聞く）を行う予定だったが、インフルエンザ等流行のため口頭依頼のみとなり、当日の進め方・役割を確認する余裕はなかった ・グループワークは、自己紹介の後、書記（発表者）の選出を各グループに一任し行った。ファシリテーターは全体共有で発表できるよう進行了 ・グループワーク②ではグループワーク①と同じメンバーで、目標※にそった検討ができたカルをどのように活用できるかさらに協議を深めることとした 目標※ （1）支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援ができるようになる （2）医療関係者と地域支援関係者が、情報を共有し同じ目標で支援ができるようになる 3 全体共有 ・総合司会が時間配分を調整しグループに発言を促した（実際は指名） ・司会進行により、8グループのすべてが発表した。時間に余裕があったため、5グループは全体共有②で2回目の発言の機会があった 【全体共有①】※発表順に記載 ・自宅内のレイアウトや移行部、階段、トイレの手すり、歩行器の種類、入浴時の問題点について検討された ・痛みの管理や糖尿病のコントロール、インシュリン自己注射など在宅生活に関する情報が共有され、退院後の生活に向けた課題が明確化された ・介助の必要性和、介護者の情報、どの程度サービスを受けているか、家族の協力体制や家族以外の繋がりや地域支援について現状把握が行われた ・本人の在宅生活への希望が確認され、家族の介護力や支援の程度について、現状把握と本人・家族の意向を確認する必要があると話し合われた

【全体共有②】

①支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援できるよう検討できたか

- ・本人や家族の意向やニーズを把握するために、家族とのコミュニケーションの重要性について協議した
- ・自宅復帰に向けた支援体制の構築において、本人の生活スタイルや趣味、好みに焦点を当てることで、より適切な支援ができるかを議論した
- ・家族の負担や不安を軽減するために、家族支援の必要性について議論し、家族への情報提供やサポートの方法を検討した

②医療・地域支援関係者が情報を共有し同じ目標で支援できるよう検討できたか

- ・医療スタッフと地域の支援関係者が連携し、退院前のカンファレンスにおいて、本人や家族の意向やニーズ、医療上の留意点について情報共有を行った
- ・ケアマネジャーやリハビリテーションスタッフとの連携を通じて、退院後のケアプランやリハビリテーションプログラムについて共通の目標を設定し、支援内容を調整した
- ・地域の介護施設や福祉サービス機関との連携を強化し、在宅復帰後のサポート体制や必要な支援リソースについて情報交換を行った

③調整ルール（様式3）から得られた情報は適切でしたか。過不足はなかったか

- ・入退院支援ルールの運用に関して、情報提供の遅延や不備による課題について具体的な事例を挙げ、改善の必要性を議論した
- ・患者の生活歴や個別のニーズをより詳細に把握するために、情報提供の項目やタイミングの見直しを提案し、より適切な支援プランの策定を目指した
- ・本人や家族が得られる支援やサービスに関する情報提供の不足について、改善策を協議し、より円滑な退院支援を実現するための対策を検討した

4 アンケート

- ・記入時間を研修時間内に設けた。アンケート回答者32名／40名。回収率80.0%。
- ・（1-1）職種 （1-2）経験年数 （1-3）研修内容評価 （2）入退院支援・調整ルールを知っているか （3）目標に沿った検討ができたか （4）希望する開催方法 （5）研修の成果 （6）今後の研修会への要望 （7）全体の意見・感想 の欄を設けた
- ・前回（66.7%）から回収率が向上した。集合形式よりも低い傾向であるため（他の研修でも同様）、記入確認の方法の検討が必要

5 閉会

- ・本日の研修で学んだことを業務に生かしていただくことをお願いし、今後も医療介護の連携が図られることを祈念し閉会挨拶とした

5 評価 達成度 について	企 画	【目 的】 北空知地域の地域医療関係者と地域支援関係者が連携して、入退院支援を進めていく関係を築く 【課 題】 1. 対象者を理解し、ニーズを明確にすることで、本人に合った支援ができるが、本人の思いを確認せず、支援を展開していることが多い 2. 切れ目のない支援を展開するために医療と介護のタイムリーな情報共有が必要であるが、その体制が整っていない 【目 標】 1. 支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援ができるようになる 2. 医療関係者と地域支援関係者が、情報を共有し同じ目標で支援ができるようになる
○→達成・ 良かった		○ 地域の入退院支援の課題に即した企画だったか → 「○」
△→ほぼ 達成・ まあまあ 良かった が課題あり		＜事例について＞ 令和4年研修と同様、架空の事例とし「腰椎圧迫骨折で入院し、在宅復帰予定の患者への支援」としてテーマを設定し、参加者が想像を膨らませ何が支援に必要なか、北空知地域入退院支援・調整ルールを活用しそれぞれの職種に応じた支援に必要な情報共有を得られるようグループワークを行った。 ・目標に合わせて事例検討を行う予定だったが、少し目標からズレて情報共有目的になることもあった。目標に戻るよう軌道修正しながら事例検討を行うようにした ・入退院支援という場面でどんな職種でも不安に思うところ、連携がうまくいっていないと感じることや温度差を感じることがあるので、課題に即した企画だったと思われる ・よくあるケースだったため、話し合いはしやすかったと思う反面、ZOOM研修特有の接続の悪さに気をとられ、直接顔を合わせないことで伝わりづらさがあったことで、思ったように同じグループの人たちの意見を聞くことや発言をすることができなかった ・事例検討の趣旨が理解しきれない状態でグループワークとなり、事例に集中することができなかった ・アンケート結果から、 ・「目標1. 支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援ができるようになる」及び「目標2. 医療関係者と地域支援関係者が、情報を共有し同じ目標で支援ができるようになる」について、アンケートにおいて、一部「できなかった」「わからない」との回答もあったが、多くの参加者が、目標に沿った検討ができたことと回答していることから概ね達成と考える ・集合研修を予定していたが、インフルエンザの流行状況を踏まえ、直前にオンラインでの開催としたが、本小部会委員11名を含む40名の参加があった ・参加人数100名を目標としていたが、40名にとどまった。本小部会委員11名を除くと29名で、他小部会委員が10名、一般参加者19名であった。このことから、参加人数については、達成できていない ・今後の開催形態として、一般参加者23名中12名がオンライン、11名が集合研修がよいと回答している。本研修は、医療機関や高齢者にかかわる専門職が対象であり、感染症対策の観点から、今年度はオンラインで開催したことは評価できる ＜事例検討のすすめ方と結果について＞ 架空の事例に基づいて参加者の職種に応じた支援の内容を話し合った ・各グループにファシリテーターを配置した ・グループでの記録は書記＝発表者に記録をお願いし、終了後回収した

	・グループワークで無言が多かったように思える。場をまとめるのではなく、意見をどんどんといえるようなグループワークの進め方が必要に思えた ○ 周知方法はどうだったか → 「○」 ・急遽オンラインとなったが、思ったより多くの方が参加してくれ、周知は問題なかった ・周知については突然の ZOOM に変更であったが、対応できた ・郵送及びメールでの周知が重複している所属もあり、今後、郵便料金が値上がりすること も踏まえて、周知方法の検討が必要と考える ・他の研修と時期が重なっているため、参加者が少なくなる要因になるかもしれない ・できれば、研修会のグループワーク前に講演とまではいかないが、発表があってもよ かったのではと思う。うまくいった事例発表など ○ 開催状況はどうだったか → 「○」 ・周知方法に同じく急な開催方法変更でも一定の参加があった ・感染症の兼ね合いから ZOOM を否定しないが集合研修の方が集中できたように思う ・ZOOM の為、積極的な発言を聞くことができなかったように思う
プ ロ セ ス	○ 小部会の打合せ・準備状況 → 「○」 ・12/7 は急遽開催方法の検討が必要になったため 1 回多くなったが仕方がない ・研修会の開催にあたっては小部会で 5 回協議した。 (6/27、7/27、10/17、11/7、12/7) ○ 小部会のメンバーそれぞれが役割を遂行できたか → 「○」 ・ファシリテーター 8 名は、本小部会委員から 2 名、他小部会委員から 4 名、一般参加者 から 2 名の協力を得た。本小部会委員以外のマンパワーも必要で、研修運営についてかなり 稼働がかかっている。今年度については、一般参加者は 19 名という状況であり、稼働に 対して研修効果があったか、検証が必要と考える ○ ねらった参加者の参加、職種 → 「○」 ・多職種になるようグループ分けされており、それぞれから話し合いをできるようにしたの で問題はなかった ・管理者も多く出席されていたが、反面、幅広い職種とはならなかったように思える
結 果	○参加者数、職種→「○・△同数⇒△」 【再参加申込みの状況（本小部会委員は運営側のため除き、一般参加者 28 名の状況）】 ・28 名中深川市からの申込みが 22 名（78.6%）、深川市外 4 町が 6 名（21.4%）であった。 ・28 名中 13 名（46.4%）が深川市立病院関係者であった ・最も申込みが多かった職種は看護師 11 名（39.3%）で、11 名中 9 名が深川市立病院から、 2 名は東ヶ丘病院からの申込みであった 【参加者 40 名から本小部会委員を除いた 29 名の一般参加者のうちアンケートに回答した 23 名について】 ・9 名（47.0%）が経験年数 20 年以上であった ・100 名の参加を目標としていたが 40 名にとどまり、40 名中 11 名が本小部会委員、10 名が 他小部会委員、19 名が一般参加者であった。約半数が、協議会関係者からの出席であった。 実際の参加者は 19 名であり、参加者 100 名の目標設定について検証が必要と考える ○ 参加者の満足度 → 「○」 ・アンケート結果からは 【参加者 40 名から本小部会委員を除いた 29 名の一般参加者のうちアンケートに回答した 23 名について】 ・研修内容については、「良かった」16 名（69.6%）、「まあまあ良かった」6 名（26.1%） と回答。「良かった」「まあまあ良かった」を合計すると 22 名（95.7%）が満足していると 考えられる

	○支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援できるよう検討できたか → 「△」 【参加者 40 名から本小部会委員を除いた 29 名の一般参加者のうちアンケートに回答した 23 名について】 ・「情報共有についてのグループワークからいきなり本人・家族の思いに沿った支援が検討できたかは評価できない」との意見があった。しかし、アンケート結果では、多くの参加者が、本人や家族の思いに沿った支援について検討できたと回答しており。目標は概ね達成できたと考える ○ 医療・地域支援関係者が情報を共有し同じ目標で支援できるよう検討できたか → 「△」 【参加者 40 名から本小部会委員を除いた 29 名の一般参加者のうちアンケートに回答した 23 名について】 ・アンケート結果では、多くの参加者ができたと回答しており、概ね目標は達成できたと考える。しかし、同じ目標での検討は難しい、わからないとの回答も数名あり、グループワークの企画・設定や進行についての検証が必要 ○調整ルール（様式3）から得られた情報は適切だったか。過不足はなかったか→ 「○」 【参加者 40 名から本小部会委員を除いた 29 名の一般参加者のうちアンケートに回答した 23 名について】 ・約半数は過不足がなかったと回答している。不足情報としては、口腔状況、服薬内容、生活歴、収入、住宅状況、家族の状況等が挙げられていた。今後、様式の検討をする場合の参考とする
まとめ	・参加目標 100 名のところ、参加者は 40 名にとどまった。40 名から本小部会委員 11 名を除いた 29 名のうち、他小部会委員は 10 名で一般参加者は 19 名であった ・ファシリテーター 8 名は、本小部会委員から 2 名、他小部会委員から 4 名、一般参加者から 2 名の協力を得た。本小部会委員以外のマンパワーも必要で、参加者が少ない上に、研修運営についてかなり稼働がかかっている ・受講者の研修満足度は高く、研修での学びは効果があったといえるが、一般参加者は 19 名で、入退院ルールの普及啓発や精度の向上という面で効果的であったとはいいがたい。また、半数近くが深川市立病院関係者であることも踏まえ、今後、研修会の開催について検討が必要と考える ・各小部会で研修会が開催され、研修が重なり負担感があるとの意見もある。アンケートでは、他小部会の研修との合同開催についても提案があり、今後、検討が必要である ・アンケートでは、入退院ルールで提供される情報について、不足情報についても言及があり、今後、様式の見直し検討をする際には、参考にする必要がある ・本研修の実施により、介護保険法における在宅医療・介護連携推進事業の「(ウ) 切れ目のない在宅医療と介護の提供体制の構築推進」については、参加者の連携の必要性の共通認識はできたが、体制構築には至っていない ・「(エ) 医療・介護関係者の情報共有の支援」は、入退院ルールを知らなかった 7 名に周知できた ・「(カ) 医療・介護関係者の研修」は実施